

対馬産蝶類数種の異常・変異について

境 良朗

蝶類の異常・変異は、斑紋、色彩、奇形、矮小、性モザイクなど多様に発現する。ここではいずれも軽微なものであるが、対馬産で認められたものを記録する。

- 1) ナガサキアゲハ *Papilio memnon thunbergii* (von Siebold, 1824)

1♀, 17-IX-2005, 対馬市厳原町久根浜 筆者撮影

白斑紋がかなり減衰した個体であるが、同傾向のものが島内の別の産地でも得られている。このことから対馬にはこのような遺伝系統が存在していることが推測される。本種は北上するチョウとして知られているが、対馬では1950年代になって記録が散見されるようになり定着した。

- 2) アオスジアゲハ *Graphium sarpedon nippoum* (Fruhstorfer, 1903)

1♂, 4-VI-2011, 対馬市厳原町安神

センダンの花に吸蜜に訪れていた多数の個体の中から採集した。中室に過剰紋が現れるエサキ型と呼ばれるもので、本個体のように過剰紋が顕著に発現した個体は比較的珍しい。同地ではこの他、ハンキュウ型や涙紋型なども確認できた。このような変異が見られるのは第1化だけであり、筆者は夏型では見たことがない。蛹越冬だが、越冬時の気温等が影響しているのだろうか。

- 3) モンシロチョウ *Pieris rapae* (Linnaeus, 1758)

1♂, 20-VI-2010, 対馬市厳原町久田

翅表は後翅基部から黒色部が少し広がっているが、裏面は前後翅ともに基部から翅縁部に向かって黒色鱗粉が広がっている。第2化であるが通常個体では後翅裏面はほぼ白色である。

- 4) モンキチョウ *Colias erate poliographus* (Motschulsky, 1860)

1ex., 11-IX-2010, 対馬市厳原町豆酸崎

オレンジ色味が非常に強い個体で飛翔しているときから赤っぽく見えた。豆酸崎では数年この傾向の個体が見られることがあったが、現在は絶えてしまった。

- 5) ヤマトシジミ *Zizeeria maha argia* (Menetries, 1857)

1♂, 23-IV-2014, 対馬市厳原町豆酸崎

前後翅ともに斑紋が流れた異常個体である。春先の第1化にはこのような斑紋異常が出る傾向にあり、多くの報告例がある。

- 6) ゴイシシジミ *Taraka hamada hamada* (H. Druce, 1875)

1ex., 3-XI-2011, 対馬市上県町佐護

これまで見てきた矮小個体の中で最もその小ささに驚かされた個体である。比較のため通常個体（下）を示したが、翅形及び斑紋も変わっているのが分かる。

- 7) ウラギンシジミ *Curetis acuta paracuta* (de Nicewill, 1901)

1♀, 24-VII-2011, 対馬市上対馬町舌崎

翅表の白青紋が減衰した夏型個体。一般的に夏型の青白紋はあまり発達しないが、後翅は白青色の鱗粉が極わずかに認められるだけである。

- 8) キタテハ *Polygonia c-aureum* (Linnaeus, 1758)

1ex., 10-X-1998, 対馬市上県町志多留

ソバの花で吸蜜していた。後翅の黒色斑紋が融合し広がった個体。前翅の斑紋も翅縁に向かって消失するなどの異常が認められる。さらに裏面も通常個体とはかなり違つて見える。



1 ナガサキアゲハ



2 アオスジアゲハ



3 モンシロチョウ



3 同左 裏面



4 モンキチョウ



5 ヤマトシジミ



6 ゴイシシジミ



7 ウラギンシジミ



8 キタテハ



8 左 通常個体 右 異常個体